変化に対応できる人材の育成を

第10代学長に就任した 渡邉浩文氏

東北工大新学長・新副学長に聞く

1964年の開校以来、建設業をはじめ東北の産業界に広く人材を輩出してきた東北工業大学。昨年４月には、北関東以北で初となる建築学部が新設されるなど将来、建設業界で活躍する優秀な人材の育成に期待がかかる。４月１日付で第10代学長に就任した渡邉浩文氏と、副学長に就いた石井敏氏に教育方針や建築学部への期待、コロナ禍という今までに経験したことのない状況化での新たな取り組みなどを聞いた。

――学長就任の抱負を

渡邉　自分の色を積極的に出していくというよりも、若手らしいフットワークの軽さや思い切りの良さを生かしていきたい。今までの学長たちが築いた基盤をしっかりと継承し、大学が積み重ねてきたさまざまな地道な取り組みの成果を一層強く社会へ発信していく。また、私が就任したことで教員・職員や学生が前向きな気持ちになれる雰囲気をつくりたい。それが学内だけでなく地域にも広まっていくことで、東北工業大学の新しいイメージが創生されていくと考える。

――コロナ禍での授業等の進め方は

渡邉　昨年は、４月下旬まで授業の開始を遅らせて、かつオンラインで始めざるを得なかった。その中で、前学期の終了後にまとまった成績データを確認すると、オンライン講義に対応しきれていないと見られる学生が一定数いる結果となった。オンラインは、分からなかった箇所を繰り返し聞けるため、復習での活用や自分のペースで出来るといった良い面もあるが、やはり対面式の授業の必要性も実感している。それらを踏まえ本年度は、対面の授業を基本としながら、オンラインの授業を組み合わせるハイブリッド型を基本方針とした。また、まん延防止等重点措置発令を受けて、対面で授業を受けたくても大学に行けないという学生がいることが想定されたため、対面授業であっても、講義をカメラで撮影し、リアルタイム配信や録画のオンデマンド配信して、受講支援体制を強化している。

――どのような学生を社会に送り出していきたいか

渡邉　本学は、東北ＳＤＧｓ研究実践拠点を設置し、その一環で円卓会議を東北各県で実施している。この中で、現地の土木・建築などさまざまな分野の人の話を聞くと、『人手が足りず、特に技術者が不足しているので、東北工大には即戦力となる技術者を輩出してほしい』という意見が多い。ただ、即戦力といっても、変化の激しい現代においては、その変化に対応できるよう、自分を変えていけるような人材こそが求められていると考えている。その対応力を発揮するには、根底にある基礎の部分が重要だ。そこで、本学では、卒業するまでに身に着けてほしい力を明文化した「共通学士力」と「専門学士力」を掲げ、基礎の部分の教育にも力を入れている。

――本年度からＡＩ等の新しいカリキュラムを導入するとのことだが

渡邉　政府が掲げるＡＩ戦略を踏まえ、１年生の前学期に「人工知能総論」という科目を全学部必修にした。１年生の後学期では、「人工知能概論」というもう少し進んだ科目も設けており、その二つで文部科学省の定めるリテラシーレベルのモデルカリキュラムを十分に満たせる内容にしている。それぞれの学部・学科の学生が、その後の専門分野の学びの中で『ＡＩをどう生かしていくか』という発想につながっていくことを望んでいる。情報通信工学科に、ＡＩの研究をしている教員がいるだけでなく、建築学部にも研究のプロセスでＡＩを使っている教員が在籍しているため、それらの研究室でＡＩをさらに実応用できるまでの視野を本学では有している。

――創部２年目を迎える建築学部に期待することは

渡邉　東北以外にも栃木や茨城などからの受験生が少しずつ増えてきた。北関東以北でも建築を学ぶ場はいくつかあるが、その中でも「学部」として位置付けられた重要な拠点になっていると認識している。学部の強みを今以上にアピールしてもらいたい。また、３・４年生の履修時に学科時代にはなかった新たな科目をいくつか設けているので、学生の反応や成果を見極め、より良い方向に育成していってほしい。

――教育・実験棟が着工するなどキャンパス再整備が始動したが今後の展望は

渡邉　開校以来、耐震改修を中心にさまざまな修繕を重ねてきたものの、一部の校舎の老朽化が顕著になってきた。そのため、以前から学内外のワークショップなどで建て替えの検討を重ねた結果、第一弾として教育・実験棟の整備に乗り出した。学内ではこれを「一期工事」と称しており、５号館や７号館、図書館等も含めて建て替える構想の「二期工事」までは実施する方針になっている。二期工事は一期工事終了後、速やかに行う予定で、食堂も眺望の良いところに配置し、より一層近隣の方々に来てもらいやすい環境を整えるなど、学内外に開かれた場となるようなコンセプトを掲げている。今後数年で八木山キャンパスの様子は大きく変わっていく。地域に開かれた『知の杜』を創出したい。

※　※　※

わたなべ・ひろのり　１９６５年生まれ。埼玉県ふじみ市出身。93年３月早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻単位取得退学。２００８年から東北工業大学教授を務め、建築学科長や工学部長、大学院工学研究科長、副学長などを歴任し４月から現職。55歳。

『工大でしか学べない建築』をＰＲ

副学長に就任した 石井敏氏

――就任の抱負をお願いします

石井　これまでは学部長・学科長として、建築学部を盛り上げ、学部が良くなることで大学全体を良くしていこうと考えてきた。これからは、学部長に加えて副学長としての立場もあるため、大学全体の視点から建築学部を捉え、ほかの二学部と連携しながら大学の発展につなげていきたい。

――建築学部が創設されて２年目となるが

石井　昨年に続き、募集定員を上回る１６２人の新入生を迎え入れることができた。受験生の反応への手応えもあったことにほっとしている。一方、昨年は新型コロナの影響で、学生たちは直接顔を合わせることもなく１年が経ってしまったこともあり、初めて建築を学ぶ学生に、建築の楽しさをどこまで伝えられたのか不安な面もある。建築を学ぶ楽しさを知るには、街に出て歩いて、見て感じることが大切だ。コロナ禍でも、建築を楽しく学べる環境をどう作っていくかを引き続き検討・模索しなくてはならない。

また、学部としての役割は、昨年初めて入学してきた１期生が社会に出て『しっかり学んできた学生だ』と評価してもらって、初めて果たされると認識している。まだスタートしたばかりなので、これから３年が勝負だ。

――建築学部の魅力を高校生に伝えるためには

石井　高校生には〝ここでしか学べない建築がある〟と訴えている。それは、本学部の教員とともに実際に東北の空気を感じ、さまざまな街を見て歩き、復興の状態を肌で感じてもらうなどして初めて学べるものだが、コロナ禍でのオンライン形式では、それらを伝えきることは難しい。どの大学にも共通して言えることだが、オンラインであればどこの大学に行っても同じということになってしまいかねない。本学にしかない魅力があるし、その部分をどう感じてもらうかというところを考えていきたい。

※　※　※

いしい・さとし　２００１年３月に東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士後期課程修了。10年から東北工業大学工学部建築学科教授を務め、同学科学科長や建築学部長などを歴任し、ことし４月から建築学部長と兼務で現職。